

「人は死ぬ」それでも医師にできること へき地医療，EBM，医学教育を通して考える

名郷直樹 著

台風を避けて朝早く島を出て、母校へき地医科大学での「離島医療」の講義に向かう新幹線の車内でノートパソコンを開いた。いつもこの時間は授業内容を推敲するためのとても大切な時間であるが、その前にこの本を一気に読み切ってしまったのがいけなかった。本のことが頭から離れない、というより何かが脳の中に染み渡ってしまって、いつものように働いてくれない。なぜだ？ 15号車11番E席の窓から、かつて著者がいた作手村の山々が見えている。できすぎている。

たかだか500人しかいない島の診療所での勤務が通算17年を越えた。これだけいれば、何だって知っているし、何にでも対処できて、迷うことなんかないようになるだろうと思っていた。でも結果は逆で、知れば知るほど知らないことは増えていくし、対処できることが増えていくのと同じようにできないことが増えていく。迷いなんて日常茶飯事、いったい自分の頭はどうなってるんだ、どこがいけないんだと自問自答の毎日が過ぎていた。

そうこうしているうちに年に一度の大学での講義の機会がやってきたのだが、ここにきて悩んでしまった。迷い悩んでいる私が講義をしたら学生を混乱に陥れるのではなかろうか、何を話して何を話さないでおくべきなのか、真実を伝えることは重要だけれどそのまま伝えて良いのか、などと根幹の部分での悩みが頭の中を駆け巡っていた。

しかし、この本を一気に読んだ後、私の角張った医師頭は紙ヤスリでゆっくりこすったように丸くなり、垂直に深く切り立った脳溝には何か温かいものが流れ、頭の中が一種の爽快感に満たされた。1つひとつの著者の言葉が大きくまとまって1つの流れになって医師頭に染み渡り、軽い高揚感とともに「推敲することも悩むことも十分したのだから、もうやめていいんじゃないか」と自然に気楽に考えるようになってし

まっていた。

「医学界新聞」の著者のコラムを読んでいた時、禅問答のようになって解釈するのが困難であったり、思考過程をそのまま書いているものだから理解するのに苦労したり、観念奔逸のようにほとぼしる言葉の洪水に溺れてしまってその本質に迫れず、逆にきつと著者は研修医の教育で疲れ果てているうえに締め切りに追われて書き殴っているのだからこんな文になっているのだろうな、というくらいにしか思い至らなかったが、なぜか読み続けずにはいられない不思議な魅力があった。しかし、この不思議な魅力も「医学界新聞」が送られてくる1か月ごとでしか感じる事ができなかったため、その大きな力を知る由もなかったのだが、この本の登場で、あの不思議な魅力がいつそうパワーアップし怒濤が押し寄せるように一気に感じる事ができるようになったのである。

こんなダイナミックな魅力の一方で、この本の中にはなるほど、とうなずかずにはいられない名言・名文がちりばめられていて、ついついメモなどして途中下車してしまいがちになるといった繊細な魅力もあるのだが、日ごろの疲れた頭をスッキリさせる爽快感がほしければ、やっぱり「一気に読む」ことをぜひお勧めする。

追記

お陰様で今回の母校へき地医科大学での「離島医療」の講義は、これまでの中で最も高い評価を得られたことを報告する。ありがとう名郷先生。

鳥羽市立神島診療所所長 奥野正孝

●A5 頁260 2008年

定価2,310円（本体2,200円＋税5%）

[ISBN978-4-260-00577-7] 医学書院刊